

Ⅲ 授業改善の実際

第5学年 国語科

「よりよい学校生活のために」～二本松南小学校を百倍ステキにする方法～
自分の考えを伝え合い、自分の考えを再構成していく中で、新たな
問いをもつ児童の育成

二本松市立二本松南小学校 樽井 奈緒子

1 単元によせる授業者の思い

本学級の児童は、素直で、学習にも真面目に取り組む。

国語科の事前アンケートでは、意見文などを書く学習において「何をどう書いたらいいかわからない」という理由から、「書くこと」に苦手意識をもつ児童が多いことが明らかになった。これまで、「書き方」を教師が一方的に教え、児童の作品を教師が添削して終わる授業が多かったことがその要因と考えられる。

よって本単元では、児童が作品を書くまでの学習過程を大切にしたいと考えた。児童自らが「書き方」を獲得し、他の場面でも使える汎用的な力として身に付けさせたい。さらに、単元全体を振り返り、何ができて何ができなかったかを明確にすることで、次の学習活動へとつなげ、学びを連続させていきたい。

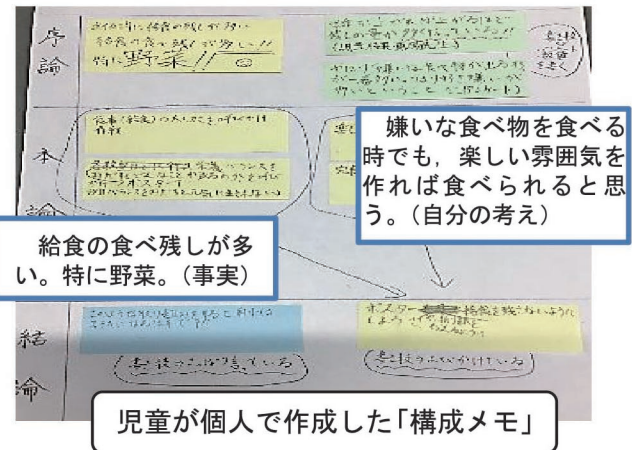


次に、実際に測定したりアンケートをとったりして情報収集を行った。



給食の残しの量を実際に測定

そして、調査結果を基に、自分が実際に体験して分かったことや、考えたことを「構成メモ」に整理した。



視点Ⅱ 自らよりよい「書き方」を獲得させるための共有の場の設定

児童自ら「何をどう書けば相手に伝わるのか」を考えさせるために、「構成」段階「記述」段階の後にそれぞれ「共有」場面を設定し、自他の表現を比べる相互評価活動を行った。「共有」では、間違いを正す添削だけでなく、相手の構成や文章のよさを見付け合い、そのアドバイスを生かして自分の考えを明

2 授業の実際

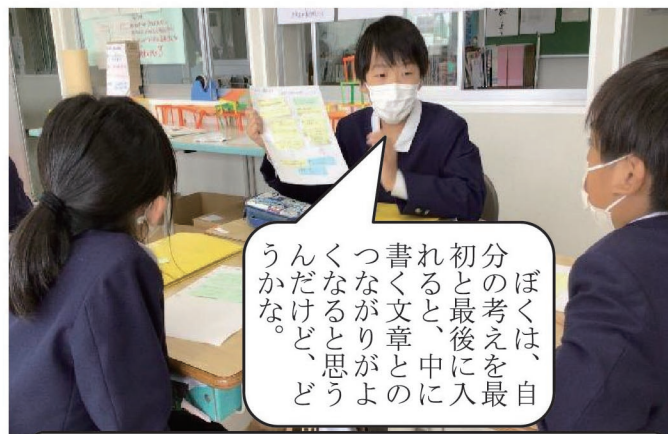
視点Ⅰ

相手意識・目的意識をもたせる単元デザインの工夫

本単元では、課題を自分事として捉え、児童自ら「書きたい」と思えるようにするために、「南小をもっとよくするにはどうすればいいか」という課題を設定した。また、「意見文を書いて、学校のホームページに載せ、多くの人に読んでもらおう」というゴールを提示し、相手意識・目的意識を明確にした。

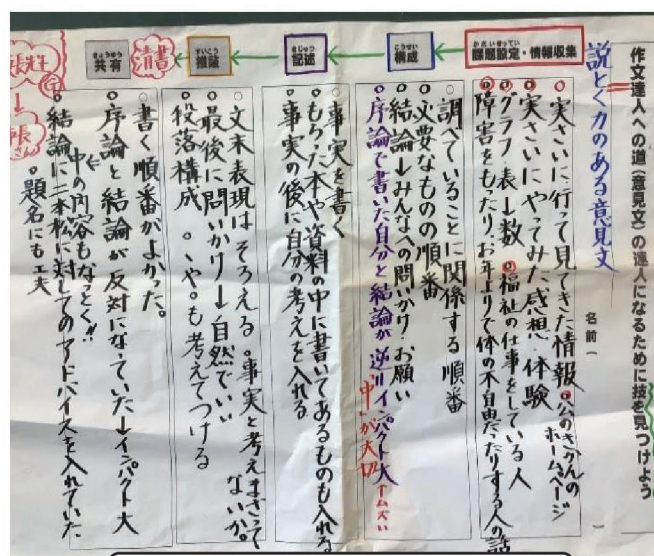
児童は、まず、自分たちの生活を振り返り、「給食の残しゼロにしたい」「元気なあいさつができるようにしたい」等、自分が解決したいテーマを考えた。

確にできるようにした。また、伝えたい相手の立場に立って見直す意識をもたせ、自分の考えを構築させた。



個人で考えた構成メモを「共有」する場面

さらに、友達との「共有」で得た「書き方」のよさを「書きワザ」としてまとめた。グループでの「共有」後に学級全体で「共有」し、「書き方」を一般化することで本単元での学びを明確にし、次に文章を書く際、使える力にしたいと考えた。



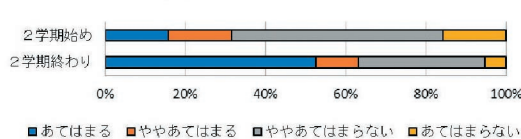
学級で共有した「書きワザ」

学級で作成した「書きワザ」は、いつでも振り返ることができるように学級内に掲示しておいた。さらに、他の単元で学習し、新たな「書きワザ」を発見した際には、内容を付け足して更新する姿が見られた。

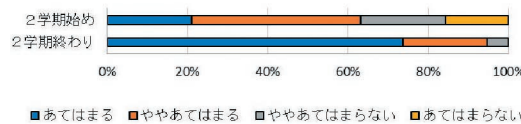
児童は「書きワザ」をもとに自分の意見文を見直し、考えを再構成していった。

3 子どもの変容

学習が進まなかった時、自分の考え方を振り返って考えることができる。



どんなに難しい問題でも誰かと協力しあえば解決できると思う。



〈考察〉

どう書いたらよいか迷った時に、「書きワザ」を生かし、自分の考えを再構成しながら授業に臨もうという意識が高まっていることが分かる。

さらに、難しい問題にぶつかった時でも、「共有」することで友達と協力し試行錯誤しながら解決しようとする児童が大きく増えたことも明らかになった。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

○ 書くためのテーマを児童の身近な生活場面と結び付けることにより、課題が自分事となり、実際に調査したり、調査結果を基に友達と話し合ったりすることで、書くための材料を自分で集めることができた。

【視点Ⅱ】

○ 「共有」をする際に「書きワザ」が根拠となり、児童は自他の「書き方」のよさに気付くことができた。さらに、本単元で何を学んだかを明確にすることができた。

● 出来上がった作品の評価に際して評価規準を教師が作成したが、今後は、身に付けさせたい力を明確にしたルーブリックを児童とともに作成し、「何ができればいいか」を児童自身が意識できるようにしていきたい。

実際の指導案はこちらへ▶

